

令和 5 年 5 月 31 日現在

機関番号：12601

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2022

課題番号：18K13300

研究課題名（和文）幼児における互惠行動の感情的基盤としての感謝の発達

研究課題名（英文）Development of gratitude in young children as an emotional foundation of reciprocal behavior

研究代表者

佐藤 賢輔（Sato, Kensuke）

東京大学・大学院教育学研究科（教育学部）・特任助教

研究者番号：00761686

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000 円

研究成果の概要（和文）：援助者がかけたコストに対する被援助者としての幼児の感受性について検討する実験を実施した。対象児に援助を行う者（パペット）が援助にかかるコストを操作し、相対的に高いコストをかけた援助者と低いコストをかけた援助者に対する対象児の感謝の表明や返報の量、援助者間の選好などについて調べた。結果、高コストの援助者と低コストの援助者に対する反応に差は見られず、月齢による反応の変化も見られなかった。結果から、感謝の生起における援助者のコストへの感受性は児童期以降に発達することが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

幼児における互惠性は単に受けた利益の大きさのみに駆動されるものではなく、援助者の善意の有無を考慮して返報量や社会的評価を変えるなど、その背後に感謝の萌芽が認められる。しかし、向社会的行動の送り手がかけたコストの高低が、幼児における感謝の生起や互惠性に影響を与えるかどうかは未解明であった。本研究では、援助者がかけたコストの高低を操作した実験により、援助者のコストに対する感受性が幼児期において認められないことを多角的な指標を用いて明らかにしたものである。

研究成果の概要（英文）：Experiments was conducted to examine the sensitivity of young children as recipients of help to the cost of the helpers. We manipulated the cost of the help to the target children, and examined the children's expressions of gratitude, the amount of return, and the preferences among the helpers for the relatively high-cost and low-cost helpers. Results showed no differences in responses to high-cost versus low-cost helpers, nor did the responses change with age. The results suggest that sensitivity to helping cost in the arousal of gratitude develops in school age and later.

研究分野：発達心理学

キーワード：互惠性 感謝 幼児

## 1. 研究開始当初の背景

### (1). 感謝の生起メカニズムとその機能

感謝は、他者による援助および援助しようとする意図に対して、援助の受け手に生じるポジティブな感情であり、社会的関係の構築、維持において重要な役割を担っていると考えられてきた(McCullough et al., 2001)。

大人における感謝の生起およびその程度を規定する要因として、多くの研究で共通で指摘されているのが、受けた向社会的行動の価値、送り手のコスト、そして送り手の意図である(Tesser et al., 1968)。生起する感謝の程度は向社会的行動によってもたらされた価値に依存するだけでなく、同程度の価値を持つ向社会的行動であっても、その行動にかけた送り手のコストが大きい場合に、また、送り手が受け手のためを思って意図的に行動した場合に、そのコストと意図を認知した受け手に生じる感謝が大きくなる傾向がある。

また、受け手に生じた感謝は、送り手への返報を動機づけるだけでなく、送り手以外の第三者への向社会的行動を促進する(Bartlett & DeSteno, 2006; DeSteno et al., 2010)。さらに、受け手の感謝の表出は、それを認知した送り手にポジティブ情動を喚起し、さらなる向社会的行動を動機づける(McCullough et al., 2001)。このように感謝は、ヒト社会における直接的、間接的な互惠行動の循環を促すという重要な機能を持っている。

### (2). 感謝の発達研究と未解明の問題

幼児期以前における感謝の発達研究は極めて少ない。3歳児は感謝に関連する言語(e.g. ありがとう)や行動(e.g. お辞儀)を表出するが(Becker & Smenner, 1986)、それは礼儀正しい行動として獲得されただけかもしれない、内心における感謝の生起を必ずしも意味しない(Freitas et al., 2011)。先行研究では、子どもの謝意の表明そのものよりも、架空のストーリーにおける登場人物の感謝感情の理解や返報行動の予測をさせる課題や、他者から恩恵を受けた状況を想起させる課題によって感謝、特にその理解の発達について検討してきた(e.g. Baumgarten-Tramer, 1938)。これら先行研究の結果を受け、幼児期の子どもが感謝を理解することは非常に困難であるという見方が広く支持されていた。

しかし、感謝の発達に関する先行研究の多くは、児童期以降の子どもに最適化された架空の状況における感謝「理解」課題を用いており、幼児における実際の感謝の生起、感謝の機能の発達について明らかになっていることはほとんどなかった。ヒトがいつから感謝を感じ、感謝はいつから互惠行動を動機づけるよう機能するかという問題は、ヒトの向社会的性の発達の基盤に迫る重要な問いであり、これを本研究において取り組む問とした。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、感謝の生起に影響する要因のうち、幼児を対象とした先行研究において取り上げられていない援助者の意図と援助コストの要因に注目し、それらを個別に操作した一連の実験により、各要因が被援助時における幼児の感情表出や返報行動にもたらす影響の発達の变化を調べることで、援助者に対する感謝がいつ頃から互惠行動の感情的基盤として機能しているかを明らかにすることであった。

研究計画段階において、2歳児が援助者の善意(援助意図)の有無を考慮して返報量や社会的評価を変えんとする研究が発表された(Vaish et al., 2018)。これは、幼児における互惠性が単に受けた利益の大きさのみに駆動されるものではなく、その背後に感謝の萌芽が認められることを示すものである。Vaish et al.(2018)における実験の内容や狙いは、本研究が計画していた実験と非常に類似性が高かったため、本研究においては、援助者の意図の影響について調べる実験を中断し、もっぱら援助コストの要因に着目した実験を行うこととした。具体的には、援助者がかけたコストの高低を実験的に操作することにより、援助を受けた幼児の援助者のコストに対する感受性の発達について、自発的な感謝の表出や返報行動など多角的な指標を用いて検証した。

## 3. 研究の方法

幼稚園に通う園児 58 名が実験に参加し、実験を完遂しなかった 1 名を除き、年少児 13 名(3;11-4;9, 平均 4 歳 4 ヶ月)、年中児 18 名(4;10-5;10, 平均 5 歳 4 ヶ月)、年長児 26 名(6;0-6;9, 平均 6 歳 4 ヶ月)の計 57 名から得られたデータを分析した。

実験は対象児が通う園の区切られたスペースで実施した。対象児は教示役の実験者 A と机を挟んで対面した状態で課題に取り組んだ。A はまず天秤を机に置き、天秤の左右の皿にももの載せて釣り合わせるゲームに取り組んでほしいと対象児に依頼した。ゲームに取り組むことについて対象児の同意を得た後、練習試行 2 試行を行い、本試行 2 試行に移行した。

本試行のうち 1 試行は高コスト援助者試行で、もう 1 試行は低コスト援助者試行であった。2 試行の順序は、学年ごとにカウンターバランスをとった。両試行とも天秤を釣り合わせると報酬(メダル)がもらえることを伝えてから開始した。A が天秤の片方の皿に物載せ、もう片方の皿に載せる重りとなる物体 3 つを対象児に渡し、一つずつ載せるよう指示した。対象児が重りを 3 つ載せ終えても皿は釣り合わず、重りが足りない状態となったところで、実験者 B が操作する

パペットがおもちゃのセットを持って登場した（服の色が異なる 2 体のパペットを 1 試行ずつ使用）。パペットが持参したセットの中には、重りとして使っていた物体と同一の物体が含まれており、A が重りの不足についてパペットに伝え、パペットは対象児に対して援助を申し出た。

高コスト援助者試行では、パペットは重りと同一の物体を 1 つしか持っておらず、対象児に渡すともうおもちゃで遊べなくなってしまうことを明言した後、物体を対象児に渡した。低コスト援助者試行では、パペットは重りと同一の物体を 2 つ持っており、対象児に 1 つ渡してもまだおもちゃで遊べることを明言した後、物体を対象児に渡した。物体を受け取る際に、対象児がパペットに対して自発的な感謝の表明を行ったかどうかを記録した。

両試行ともパペットから渡された物体を対象児が皿に載せると天秤は釣り合い、A は対象児に報酬のメダルを 5 枚渡した。その直後パペットが、対象児に対してメダルを分けてほしいと依頼した。対象児が援助の返報としてパペットに渡したメダルの枚数を記録した。対象児の返報の有無に関わらず、パペットはおもちゃを持ち、立ち去り試行が終了した。

本試行 2 試行の後、選好課題と強制分配課題を実施した。選好課題では、本試行に登場したパペット 2 体を対象児の前に提示し、次に一緒にゲームをするとしたらどちらのパペットと一緒に遊びたいかを尋ねた。強制分配課題では、対象児に 3 本の造花を渡し、花が残らないように 2 体のパペットに分配するよう指示した。

#### 4. 研究成果

学年（年少、年中、年長）を参加者間要因、コスト（高、低）を参加者内要因とし、被援助時の自発的な感謝の表明の有無、援助者に対する返報の量（渡したメダルの枚数）、選好課題における選択率、強制分配課題における分配量のそれぞれを従属変数とし統計的分析を行ったが、いずれの指標においても、学年とコストの主効果および交互作用は有意ではなかった（ $p > .19$ ; Table 1）。また、いずれの指標についても月齢との間に有意な相関はなかった。

本実験では、幼児を対象として、援助者がかけたコストの高低に対する感受性について多角的な指標によって検討したが、より高いコストをかけてくれた援助者をそうでない援助者よりも優遇する傾向はいずれの指標においても確認できず、年少から年長にかけての発達的な変化も全くみられなかった。これらの結果から、援助者のコストに対する感受性は児童期以降に発達していくことが強く示唆された。

Table 1. 学年ごとの各課題におけるパフォーマンス

	自発的な感謝の表明		平均返報量（最大 5）		選好課題	強制分配課題
	高コスト試行	低コスト試行	高コスト試行	低コスト試行	高コスト選択	高コスト優遇
年少児	61.5%	61.5%	1.54	1.62	53.8%	46.2%
年中児	61.1%	61.1%	1.44	1.67	61.1%	41.2%
年長児	80.8%	76.9%	1.85	1.92	46.2%	54.2%

#### <引用文献>

- Bartlett, M. Y., & DeSteno, D. (2006). Gratitude and Prosocial Behavior: Helping When It Costs You. *Psychological Science*, 17(4), 319–325.
- Baumgarten-Tramer, F. (1938). “Gratefulness” in Children and Young People. *The Pedagogical Seminary and Journal of Genetic Psychology*, 53(1), 53–66.
- Becker, J. A., & Smenner, P. C. (1986). The spontaneous use of thank you by preschoolers as a function of sex, socioeconomic status, and listener status. *Language in Society*, 15(4), 537–545.
- DeSteno, D., Bartlett, M. Y., Baumann, J., Williams, L. A., & Dickens, L. (2010). Gratitude as moral sentiment: Emotion-guided cooperation in economic exchange. *Emotion*, 10(2), 289–293.
- Freitas, L. B. D. L., Pieta, M. A. M., & Tudge, J. R. H. (2011). Beyond politeness: The expression of gratitude in children and adolescents. *Psicologia: Reflexão e Crítica*, 24(4), 757–764.
- McCullough, M. E., Kilpatrick, S. D., Emmons, R. A., & Larson, D. B. (2001). Is gratitude a moral affect? *Psychological Bulletin*, 127(2), 249–266.
- Tesser, A., Gatewood, R., & Driver, M. (1968). Some determinants of gratitude. *Journal of Personality and Social Psychology*, 9(3), 233–236.
- Vaish, A., Hepach, R., & Tomasello, M. (2018). The specificity of reciprocity: Young children reciprocate more generously to those who intentionally benefit them. *Journal of Experimental Child Psychology*, 167, 336–353.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 佐藤賢輔
2. 発表標題 紙とデジタルノイラストとアニメ：読書における幼児の思考と行動のメディア間比較
3. 学会等名 日本発達心理学会第34回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 佐藤賢輔
2. 発表標題 絵本・本・デジタルメディアと子どもの心理学
3. 学会等名 第108回全国図書館大会群馬大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 佐藤賢輔
2. 発表標題 幼児における家庭での読書およびスクリーン視聴の実態とリテラシーおよび社会情動的スキルとの関連
3. 学会等名 日本心理学会第86回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 佐藤賢輔・浜名真以・廣戸健悟
2. 発表標題 幼児と保護者による絵本およびデジタル絵本の共同読み場面の比較：オンライン実験による検討
3. 学会等名 日本心理学会第85回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 浜名真以・佐藤賢輔・廣戸健悟・二村郁美
2. 発表標題 絵本およびデジタル絵本を読む際の母子相互作用の分析
3. 学会等名 日本発達心理学会第32回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 佐藤賢輔・浜名真以
2. 発表標題 Zoomを用いた対話型のオンライン実験：絵本の読み聞かせをテーマとして
3. 学会等名 日本発達心理学会第32回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 佐藤賢輔
2. 発表標題 幼児における他者の指さしの意図の推論
3. 学会等名 日本発達心理学会第30回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------